

保育における二人称的アプローチ④

「感じる」と「知る」と

佐伯胖
(大学教員)

「感じる」とは何か

「感じる」といえば、通俗的には「五感」(視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚)の働きたとされるかもしれませんが。これらの感覚に加えて「クオリア (qualia)」「質感」ともいわれるが適訳がないためカタカナ表記が普通)も含めて「感性」と呼び、英訳「KANSEI」までつけて日本文化の中心なのだと言伝けんてんする風潮すらあります。人の心理や教育にかかわる人たちならば、感情、情動、情感、気分といった「心で感じることをまつさきに思い浮かべられるかもしれません。いずれにしても、多くの人たちは、「感じる」ことは、少なくとも「知ること」とは違う、とされるのではないのでしょうか。「知ること」というのは「頭で考えること」であるのに対し、「感じる」のは「体(あるいは心)が反応すること」というのが一般的な解釈ではないのでしょうか。

本稿では、「保育における二人称的アプローチ」の最終回にあたり、「二人称的アプローチ」の最も大切な点として、「感じるということ」こそが、物事を深く「知ること」なのだということを説明しておきたいのです。

「知る」といつ働きの起源

「知る」という働きの起源をたどったときに行き着くのは、数万年前に描かれた洞窟壁画ではないでしょうか。明らかに、太古の人たちが何か「わかったこと」（心に留めておきたいこと）を形にして残そうとした痕跡が、アルタミラやラスコーの洞窟に数万年前に描かれた壁画でしょう。

私は数年前、一九九四年に発掘された世界最古とされるショーヴェ洞窟壁画（三万二千年前のものとされる）の記録映画（3D画像）を観ましたが、洞窟内に描かれている馬、野牛、マンモス、熊たちの姿に圧倒されました。それらの動物が集って駆け巡り、ぶつかりあっている、まさにその「現場」に立ち会っている感覚にとらわれて見入ってしまいました。一步離れて分析すれば、映画のナレーションが解説していた通り、その「見事な描写力」は近代の画家たちの力量に引けを取らないレベルのものでしたが、その映画を観ていた私たちには、それらの動物たちの吠え声、うめき声、駆け巡るひびく音、さらに、それを間近に見ている人（描き手）の息遣いや心臓の鼓動さえ感じてしまうものでした。私たちは確かに、三万年以上前の人たちの「知る」という経験を「共にしている」実感を持った次第です。

二〇一〇年二月十九日付の『日本経済新聞』朝刊の「文化」欄に、中央大学教授の山口真美氏が「ラスコーの壁画」についてのコラムを寄せています。

1万5千年前のラスコーの壁画には、生き生きとした動物の姿が描かれている。その表現に

は驚くばかりだが、真骨頂は空間の描き方にある。

2次元の絵に奥行きのある3次元世界を描き出す遠近法の技術を発明したのは、ルネサンス時代の芸術家だといわれる。ところがはるか昔の旧石器時代に、近代絵画の手法は使われていたのだ。

堂々と描かれた黒い牛の後ろには、ぼんやりとした馬の姿がある。遠くにいる馬は、牛よりも小さく描かれている。牛の角をよく見ると、手前の角は奥よりもしつかりと太く描かれている。これらは奥行きを描く絵画的な手法である。近いものは大きく遠くのは小さい、遠近法の基本がそこにある。

こうした絵画表現から、当時の人々の精神構造を考えるのも興味深い。たとえば精神発達からすると、空間表現は空間認識能力の発達を反映する。幼い子どもは、奥行きのない平べったい絵や、空間を無視した絵を描くからだ。

しかし最近の研究から、幼稚な絵画表現は抽象的な概念形成に直結することがわかってきた。プロ顔負けの写実的な絵を描く児童が言葉を学習した途端、普通の子のような稚拙な絵を描きだしたという。顔から手足の出ている薄っぺらな人の姿の横に、モデルの名前が書かれていた。写実的に対象を表現する代わりに言葉を使うようになったのだ。

この最後の一節にある「プロ顔負けの写実的な絵を描く児童が言葉を学習した途端、普通の子のような稚拙な絵を描きだした」というのは、「怖い話」ではないでしょうか。ここでいう「言葉」というのは、明らかに「書き言葉」でしょう。「話しことば（あえて、かな書きにしますが）」は、

その子だって、また、ラスコーの壁画の描き手だって、もちろん、シヨーヴェ洞窟壁画の描き手だって、堪能だったに違いありません。

「書き言葉」の怖さ

文字を使って表す「書き言葉」は、古代エジプトのヒエログリフの頃から、明らかに「事実を記述する」ための記号です。目の前の誰かに語りかける「ことば」ではありません。当然、傍観者の観察を書き手に強いるのであり、書き手は「三人称的」見方にならざるを得ないのです。したがって、目の前の「事実」を「AはBなり」というような命題表現で表すので、「感じる」こと（思わずわき起こる情感）は抑制することになります。

しかし、教育（含、保育）の世界では、指導計画も実践記録も実践報告もすべて「文字で書く」ことが要求されますし、子どもたちにも、「ちゃんと言葉で表現すること」を要求します。このような「文字言語中心主義」は、「知る」という営みの原点である「感じること」を排除することになっではないでしょうか。そこから「子どもを見る」ときにも、「言語的表現」を思い描いて見えてしまっているとしたら、それだけは避けたいことです。ぜひとも、「感じる」という知り方があるということ、むしろ、それこそが、「本当に知る」ということなのだということを、本シリーズの最後にあたって、皆様に申し上げておきます。

— 終わり —